新田次郎　アラスカ物語

アラスカ物語

新田次郎

新潮社版

アラスカ物語（ものがたり）
昭和四十九年五月二十五日発行
昭和四十九年十二月五日七刷
定価九五〇円
著者　新田次郎（にったじろう）
発行者　佐藤亮一
発行所　新潮社
〒162 東京都新宿区矢来町七一　振替東京八〇八
電話業務部03(266)五一一一編集部(266)五四一一
印刷　株式会社金羊社
製本　新宿加藤製本

© Jiro Nitta, 1974,　Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

第一章　北極光
第二章　北極海
第三章　ブルックス山脈
第四章　ユーコンのほとり
終章　アラスカ取材紀行

5
69
139
219
287
311

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

アラスカ物語

カバー・扉写真　山下喜一郎

第一章　北オーロラ極光

1

フランク安田は、それを見まいとした。眼を氷原の上に落してひたすら歩き続けようとした。だがそうすることはすこぶる危険なことであった。方向を失ったときは死であり、彼の死は同時にベアー号の死でもあった。

フランク安田は眼を上げて北極光（オーロラ）を見た。

空で光彩の爆発が起っていた。赤と緑がからまり合って渦を巻き、その中心から緑の矢があらゆる空間に向って放射されていた。彼に向って降りそそがれる無限に近いほど長い緑の矢は間断なく明滅をくりかえしていた。

光の矢は彼を射抜くことはない。それは頭上はるかに高いところで消えた。だが、消えた緑の矢は、感覚的には、姿を隠したままで、彼に向って降りそそがれていた。身体に痛みこそ感じないが、恐怖は彼の全身を貫き、しばしば立止らざるを得なかった。

空間で爆発する光彩のきらめきがあっても音はなかった。空間いっぱいを埋めている、濃緑色の矢のうなり音も聞えなかった。すべてが静寂な暗闇の中で行われていた。

彼は北極光（オーロラ）が想像もつかないほど高い空で起る神秘的自然現象であり極地でしか見られないものであることを既に知っていた。何等危害を加えるものでないことも知っていた。

それは夜空に咲く花でもないし、打ち揚げられた煙火のようなものでもなかった。それこそ暗い空

間における色彩の舞踏であり、夜の天帝の権威を背景にした威嚇であった。
虹とは全然異ったものだった。虹には色の配列の順序が決められていた。色と色の境目には中間色があった。
オーロラと虹との間には空間における色彩の表現の一つという以外には、ほとんど共通点はなかった。オーロラには虹のように、配列秩序に規則がなかった。色と色との境界をその両側の色の中間色に接続することもなく、不連続に赤から緑にまた突然黄色に転じていた。オーロラは原色に満ち満ちていた。原色以外の色もあったが、その色はすべて個性的で、オーロラという場でしか見られないものであった。
オーロラが出現すると、氷原が明るくなったように見える。確かにいかほどかは明るくなる。しかしそれはごく僅かな明るさであって、月の出ほどに期待されるものではなかった。明るさはあったが、少なくとも星の明るさよりも華麗な明るさというだけのことであり、北極海は、オーロラとかかわりのない黒い氷原として横たわっていた。
オーロラは静止している部分がなかった。あらゆる部分がせわしく動いていた。明滅を性急に続けながら揺れ動いていた。色彩の渦が空を回転しながら走ると、その後に赤い流れができ、それが河になり、帯となった瞬間、変転して緑の大蛇となった。
フランク安田にはこの次になにが起るかが不安だった。このような恐ろしい光景を何時間も見ていたら、気が狂って終には死ぬだろうとさえ思った。
眼を閉じよう。そして天の怒りがおさまるまで動くのを止めようと思った。彼は背負っていた荷物をおろし、敷皮を氷原の上に延べ、毛布にくるまった。
彼が色彩の狂乱に対して恭順を示したとき、北極光もまた彼に対して、いささか態度を変えたようであった。明滅には変化がなかったが、色彩が穏やかになった。原色の濃度がうすめられたがために、

景観が全体的に静かになった。緑の蛇は延びるだけ延びた後でS字状に縮まり、胴のふくらみが面に変り、そのまま氷原に向って垂れた。たちまちそれは緑一色の厚手のカーテンになり、カーテンが揺れるたびに、その陰影のように新たに黄色の光彩が現われた。

カーテンは揺れながらかなりの速度で空間を流れた。流れることによって少しずつ色あせて行った。色彩で空間が埋め尽されたとき、オーロラは南に向って流れ出し規模を収縮して行った。どうやら、夜空の饗宴はその終りに近づいたようだった。緑と黄色の縞のカーテンは、やがて二色の斑点となって南の果てにしぼんで行き、やがて消えた。後には星が輝いていた。

フランク安田はオーロラの消えた方向に正対してしばらく考えていたが、そのままそこに蹲って懐中から磁石を出し、マッチを擦った。米国沿岸警備船ベアー号のハーレイ船長との別れのひとこまが思い出された。

〈フランク、ここでは磁石はあまり当てにはならない。しかし、他に当てになるものがない時にはやはりこれを使わねばならない。おそらく君は極地における磁石の使い方を知っているだろうけれど、念のために話して置こう。磁石の示す北は地理上の北ではない。ほんとうの北は磁石の示す北より西に二十五度寄ったところにある。そのことをはっきり頭の中に入れて使わないと、とんでもないことになる。北極星は頭上にありすぎて、これも頼りにはならない。月だが、極地の月はぜんぜん気まぐれだ。月齢によっても季節によっても、また年によってもその動きが違って来る。冬至のころ満月だったとしても、その月の南中時の高度は年によって四十六度から三十六度まで変化するし、北に廻ったときの高度も十度から零度まで変化する。つまり月は当てにならないということだ。ただ、月も太陽と同じように、その高度が一番高くなるときは、一番南に近づいたということになる。その逆に一番低くなったときは北に近づいたということになる。このことを頭に入れて置けば、月もまんざら捨てたものではない。しかしなんと言っても、極地の暗夜の期間中に一番たよりになるのは、一日に一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

度やって来る青い夜明けだ。その青い夜明けの方向が南だから、それを眼ざして行けばポイントバローへ行きつくことができる。いいかね、フランク、お前が行かねばならないポイントバローは南の方向にある。南に向って一三〇マイルほど歩いたら、北極海の氷原とアラスカ大陸との境界線に出る。その海岸線を二〇マイルほど北東に向って歩けばポイントバローだ。南の方向を間違えるなよ。一日に一度訪れる青い夜明けの見える方向が南だ。確実に南の方向をつかむには青い夜明けにたよるのが一番だ〉

ハーレイ船長はその言葉を再度繰返して言ってから、

〈君の成功を祈る〉

と言った。低い声だった。自信のない声だった。成功を祈ると言われているのにさよならと言われているように聞えた。ハーレイ船長の眼には同情だけがあった。期待はなかった。絶望に近い気持で、成功を祈ると言わねばならない、船長としての義務感だけが表面に浮いて見えた。

フランクはいまオーロラが消えたばかりの空に眼を投げた。

「磁石によるとオーロラの消えたあたりが南になる。南へ南へと歩かないかぎり生きることはできないのだ」

そう言いながら見上げると北極星が頭上にあった。北極星と彼を結ぶ方向が北であることには間違いはないが、北極星の反対方向に当る南は、彼が踏みしめている氷原の直下になる。北緯七十度以北になると、たとえ北極星が見えても、北極星を道案内として旅をするのは、測定器械なしではむずかしいことなのだ。

彼はオーロラの消えた方向に輝いている星を目標とした。星の名も知らないし星座も知らなかった。しかし、彼が選んだその星はかなり明るい星であり、運がいいことには、南の地平線の近くに輝いていた。

その星を眼ざして歩けば、南に向って歩いていることになる。星は時間と共に動く。しかし、その星の動き方には法則がある。その星は地平線に対して或る角度を持って静かに動いていた。動いた時点で、その星を、その傾斜角に沿って地平線に戻せば、そこに南を発見できるのだ。

彼は荷物をまとめた。そして、南に向ってゆっくりと歩き出した。時々磁石を出して南の方向をチェックした。

静かな夜であった。このような夜が続けば、ポイントバローに到着することは、そうむずかしいことではないと思われる。

ベアー号を離れてから既に五日経っていた。青い夜明けの空を目標にしてベアー号を後にしたが、青い空は三時間で暗い空になった。北極海にまがりなりにも、朝らしい明るさが見えるのはこの三時間だけであった。後の二十一時間は光はなかった。

出発して二日目に嵐になった。吹雪は三日間続いた。動くことはできなかった。そして五日目に、彼はオーロラを見たのである。

ベアー号を出発したとき彼は頭の中で計算した。五日間で一三〇マイルは踏破し、そこらあたりにあるアラスカ大陸の北限の地を発見しようと思っていた。だが歩いたのは、最初の一日だけで、次の三日間は、吹雪の中で、エスキモー犬のように蹲って眠っているより仕方がなかった。だから彼は今、歩かねばならなかった。持っている食糧に限りがあった。ハーレイ船長が十日分の食糧を分けてくれた。その食糧が尽きるまでに、ポイントバローを発見しなければ、彼は確実に死ぬことになる。そしてもし、彼が死んで、氷に封じこめられたベアー号救援の手がさし延べられないということになると、おそらく、ベアー号では食糧を巡っての争いが起り、乗組員のうち何人かは死なねばならないような事態に立ち至るだろう。

米国沿岸警備船ベアー号は三本マストの大型機帆船（発動機付帆船）だった。真白く塗られた八百五十噸の警備船ベアー号は快速をもって鳴らしていた。大砲も持っていた。戦うための大砲ではなく、密猟船に警告を与えるための大砲だった。

かつて、北極海は鯨の宝庫であり、海獣の狩場だったが、ロシヤがアラスカを支配していたころ、ほとんど無制限に近い濫獲がなされたがためにこれらの動物たちは急激に減少した。ロシヤはアラスカを見限ってアメリカに売った。アメリカは、高価な冷蔵庫を買ったものだと、諸外国から陰口を叩かれながらも、アラスカを買い取ると、まず北極海の動物資源保護に乗り出した。原住民以外の者が海獣を獲ることを禁止した。エスキモーには古来からの特権を認めてやることによって、彼等の生きる道を開いてやったのである。

沿岸警備船ベアー号は北極海における密猟を監視するために派遣されていた。鯨は絶滅に瀕し、他の海獣もまた同じ運命にあった。海獣によっては保護区域を設けていたが、密猟船の中には悪名高い海狼号のようなものがあって、鯨の密猟をするばかりではなく、北極海の沿岸のエスキモー部落に乗りこんで殆んど掠奪にひとしい方法で、彼等がためこんだ毛皮類をかっさらって行った。海賊船同様の船であった。

ベアー号は海狼号をその年も追い廻していた。海狼号が法を犯した現場を見つけて、拿捕しようとした。だが海狼号は巧みにベアー号の裏をかいて、その年も北極海と北極海に面したアラスカ沿岸を荒し廻っていた。

如何なる船も九月の半ばを過ぎれば北極海におさらばすることを考えねばならなかった。年によっては一ヶ月も早く、氷が張りつめることがあった。

ベアー号が海狼号が現われたという情報を得たのは九月の末であった。そろそろ引き揚げようとしていたところに入って来た情報だった。

ハーレイ船長は海狼号を追った。今度こそ不法を行う現場を取りおさえ、武装を解除し、主なる船員を捕え、船を拿捕してやろうと考えた。だが、海狼号はとうとう捕えることはできなかった。そして、ベアー号はポイントバロー北方一三〇マイルの海上で突然襲って来た異常寒波による気温の急降に遭遇し、氷の中に封じこめられたのである。

フランク安田は、ベアー号を取り巻く蓮の葉状の氷を見たとき美しいと思った。氷の蓮は太陽の光を受けてきらきらと輝いた。だがその氷の蓮の葉は見ている間に面積を拡げ、氷の蓮の葉と蓮の葉の間に隙間がなくなると、海は消え、そこに想像もしなかった氷原が出現した。ベアー号は氷から脱出しようと努力した。しかし、脱出速度より、氷の生長速度の方が上まわっていた。ベアー号は一夜にして、北極海の捕虜になった。

〈これで一冬、北極海の氷の上で寝て暮すことになったのか〉

と船員たちは口々に言った。だが、彼等はそれで取り乱すようなことはなかった。こういう場合を想定して、一冬過すだけの食糧は積みこんでいた。乗組員三十七名は、食糧のことよりも、退屈きわまる暗闇の冬をどうして過すかを心配していた。

十一月になると太陽は地平線の下に消え、やがて夜だけの世界がやって来た。うさばらしを兼ねたパーティーが船内で行われた。船員は飲んだ。食べて歌った。そして、お定まりの喧嘩があった。ジョージという船員がマックという船員に殴り倒された。

〈くたばれこの野郎〉

とマックがジョージに言った。

〈ああ、おれはくたばるさ、くたばって見せてやらあ、しかし、てめえだって、そのうちくたばる。それも、ただのくたばり方じゃあないぞ、飢え死にだ〉

ジョージは倉庫掛りをやっていた。このジョージの一言で、大騒動になった。正気になったジョー

ジが言うには、食糧庫には一冬越すだけの食糧がないというのである。
クリスマスのパーティーどころではなかった。総動員して、倉庫の中の食糧を点検して見ると、あと二ヶ月分の食糧しかなかった。六月まで待てば氷が溶けて船が来る。ところが食糧のほうは二月にはなくなるということになる。
ハーレイ船長は消えた食糧の行方を調査した。ベアー号は監視船の任務のかたわら、北極海沿岸に定住する人たちに対する補給船をも兼ねていた。
その夏ベアー号は北極海沿岸の数ヶ所に停船し食糧や物資をおろした。ポイントバローのように捕鯨船の基地として発達し、同時に白人毛皮商人の定着地となったところでは、彼等の一年分の食糧や必需品を補給した。ポイントバローには捕鯨船の会社が経営している交易所と個人交易所が一ヶ所ずつあった。
調査の結果ポイントバローで荷揚げされた荷物について疑いがかかった。
ポイントバローにおいて荷揚中、事務長は軽い眩暈を起した。二日目の荷揚中のことである。事務長は肥満体で、血圧が高く、それまでにも、時々頭痛や眩暈を訴えることがあった。パーサーは、それまで助手として使っていたフランク安田に、あとを任せて自室に戻った。
それまでには段取りはすべて終っていた。あとはビル・ワーレス宛に依託された荷物をおろし、ワーレスから受取り書を貰えばよいことになっていた。
ビル・ワーレス宛に依託された荷物は主として食糧であった。荷揚げは引き続いて行われる筈だったが、急に天候が悪化し吹雪になった。ポイントバローでは夏でも吹雪になることは珍らしくはなかった。
作業は三時間ほど中止され、天気の恢復を待った。夜のない季節だった。晴れると太陽が出た。そしてそれは一日中沈むことなく、低い空を廻り続けていた。

荷役作業は再開された。

フランク安田は事務長に言われたように、ベアー号から、ボートに移され、さらに流氷の上におろされた荷物が、再びエスキモーたちが漕ぐ皮張舟（ウミアック）に積みかえられて、陸揚げされるのを待って個数を数え、ビル・ワーレスに引き渡し、その受取り書を取った。

ハーレイ船長は事務長に訊いた。

〈君が荷役監視の眼を離したときに、なんらかの不正が行われたとは考えられないかね〉

〈不正が行われたとすれば、多分それは、吹雪となった三時間の間のできごとではないでしょうか〉

事務長は腕を組んだ。

三時間の吹雪の最中に、ベアー号の船艙から、食糧の梱包が運び出されて、ベアー号とポイントバローとの中間に、浮島のように動かない、流氷のブロックの中に隠しこまれたと仮定すればどうであろうか。

〈もしそのような悪事が行われたとすれば、多分、その日荷役に当った五人の水夫とビル・ワーレスとがぐるになってやったことだろう〉

と言った。

〈そのとき、フランク安田はどうしていたのだ〉

ハーレイ船長はまさかフランク安田がこの悪事に加担していたとは思わなかったが一応訊いてみた。

〈フランクは、私の代理として荷物の数をたしかめ、ワーレスに引き渡す仕事をやっていた。彼には荷揚げを監視する義務もないし、たとえ、その権限があっても、吹雪の中で行われた悪事を発見することはできなかったでしょう〉

事務長は、そこで、すべての責任は自分にあると言った。

〈あの五人に監視の眼をおこたったことが手落ちだった〉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com